マイ・ミュージックポートレート

主体性のない人生にも
音楽はあった

junike

まえがき

NHKのEテレで「ミュージックポートレート」という番組がある。
各分野の著名人が人生で大切にしている１０曲を持ち寄り、二人で対談するというもの。

それを真似して、自分の場合の１０曲というものを選んでみた。

とはいっても、自分はその番組に出ているような何かを成し遂げた人でもないし、たいした経験も人生も送ったわけでもない。
サブタイトルに「主体性のない人生にも音楽はあった」と書いた。ネガティブのようでポジティブに見えるが、本当は「空っぽの人生」としようかとも思った。でも一応それなりに何かしらあったので「主体性のない人生」としてみた。４曲目あたりにちらっとその訳が出てくるかもしれない。

市井の、うつ病の、４０過ぎたおっさんの、つまらない人生にも一応いくつかの曲はあったので、それを書いてみよう。
つまらないわりに、だらだらと書くかもしれないので、目次を見て、適当に飛ばすなりしてください。

目次

１．音楽との出会い
　子門真人　「およげ！たいやきくん」

２．初めて買ったレコード
　沢田研二　「麗人」

３．青春
　村下孝蔵　「初恋」

４．自分らが演奏した方がいいんじゃないか？
　大河ドラマ『独眼流政宗』のオープニングテーマ曲

５．カラオケ
　田原俊彦　「抱きしめてTONIGHT」

６．生歌を聴いて泣いた曲～その１
　岡本真夜　「銀色の週末」

７．生歌を聴いて泣いた曲～その２
　中島みゆき　「あした」

８．歌のうまさというものを実感した
　美空ひばり　「川の流れのように」

９．父との広島旅行は直接の関係はありません
　いきものがかり　「ＳＡＫＵＲＡ」

１０．人生最期に聴きたい曲
　Ｊ．Ｓ．バッハ　「小フーガト短調」

１．音楽との出会い

子門真人　「およげ！たいやきくん」

「音楽との出会い」を正確に探ろうとすれば、おそらく幼稚園時代の童謡なり、それ以前の家庭で聞いたものなどがあったのかもしれないが、自分のもっとも古い確かな記憶としてはこの曲だと思う。

小さい頃、母と一緒に市の中心部にあるレコード店に行ってレコードを買ってもらったという記憶がある。

子供心に思ったのか、それともずっと後になって思ったのかもはやわからなくなってしまったが、この曲にはちょっと突っ込みたいところがある。

いちばん最後に、この「たいやき」は食べられてしまう、という終わり方をしているのだけど、食べられてしまったのだったら、最初からそこまでを歌っている「僕」は誰なのさ？ということ。もう食べられてしまった「僕」なら、歌うこと自体ができないではないか、としょうもないことを考えていた覚えがある。

子門真人といえば、この曲以外にも当時はアニメの主題歌を多く歌っていたように思う。
それらも時期的には小さい頃、この曲と同じ頃だったかもしれない。
ただ、生活の記憶と確かに結びついていたのは、母とレコードを買いに行ったこの曲だった……。

２．初めて買ったレコード

　沢田研二　「麗人」

自分の小遣いで初めて買ったレコードはなぜかこの曲だった。
当時は「ザ・ベストテン」等のランキング音楽番組が人気で、いわゆる８０年代アイドルたちも出始めた頃だったが、なぜか最初のレコードはこれだった。何でなのかは、いまだにわからない。たまたまそういうタイミングだったのかもしれない。

おそらくこの曲名を書いてもどんな曲なのかすらもわからない人の方が多いと思う。もっと有名な曲があるから。

Youtube検索結果

Youtubeで「沢田研二 麗人」で検索すると出てくるのだが、２番目くらいに中国語らしき字幕つきのものがあった。

これが子供の頃の記憶としても残っている。

先ほど書いた「ザ・ベストテン」か何かで一度、中国語らしき字幕つきのものが放送された。
当時家庭用のビデオデッキが発売されたばかりのころだったと思う。
たまたま録画してあって、一時停止させながら全部書き写した。そして、それを当時の担任の先生に見せて、「これ読める？」みたいないじわるをした思い出がある。第二外国語で中国語を取っていたとか聞いたような気もしたが、結局わからなくて、友達とほくそ笑んでいた。

このレコード以降は、まあいろいろと日本のヒット曲ばかりだけど、そういったものを買い込んでいた。
これを最初の一歩として。

３．青春

村下孝蔵　「初恋」

自分自身の初恋は多分小学校４年生だか、６年生だったかなと思う。
この曲がヒットしたときは中学生だった。

曲そのものもいい。声もいいし、メロディーも、詞の世界もいい。
そして、当時はレコードジャケットがイラストで村下孝蔵という人がどういう感じの人なのかがわからず、ミステリアスな印象があった。当然テレビにも出ていなかったので。

当時好きだった子は「放課後の校庭を走る」ような感じではなく、自分自身が放課後の校庭を走りながらこの曲が頭の中を流れていた。

曲の内容と同じように自分からは何も言えずに初恋は……。。。
「振り子細工の心」ってどういう心なんだろう？？

当時はこの曲しか知らなかったのだけど、しばらく後になってアルバムを買うと「踊り子」などいい曲がたくさんあった。いつかコンサートに行きたいと思っていた矢先に、亡くなってしまった。

ぜひとも生で聴いてみたかったが、それはもう叶わない。

４．自分らが演奏した方がいいんじゃないか？

大河ドラマ『独眼流政宗』のオープニングテーマ曲

ちょっとした変化球の選曲だったかもしれない。
この大河ドラマは視聴率の面でもとんでもなくすごかったらしかったのだが、放送されていた高校生当時、実は一度も見たことはなかった。

高校のとき、吹奏楽部に入っていて、秋の文化祭のときに実はこの曲を演奏したという記憶が鮮明に残っている。
その際に、本物を聴いてみようとテレビを見たのだけどあまり参考にならなかった記憶があった。
そして、これを書いている今年（２０１４年）になって、BSの方で再放送をしているのをまた改めて聴いてみた。やはりこれは参考にならないな、と思った。
何というか、自分たちが演奏していたものに比べるとテレビのものはそちらが本物ではあるものの雑に聞こえた。
自らが演奏しているから、それぞれのパートの細かいところまでわかっているからこそ、そう感じたのもしれない。
自分のパートはテナーサックスだったのだけど、メインのパートを吹くときもあれば、バックメロディーみたいなところを吹くときもあった。何より他のパートと折り重なっていく感覚が自分らでやっていて、すごく気持ちがよかった。

吹奏楽部へは自分の意志で入部したわけではなかった。
入学時に友人になった人に半分つき合うような形で入った。主体性もなく。
楽器でテナーサックスを選んだのは単に当時流行っていたチェッカーズの尚之が吹いているのが格好良かったので、そんなミーハーな気分だった。しかし、周りはみんな中学からの経験者ばかりだし、音楽もクラシック中心の話題で、自分は場違いな存在だった。

そういう意味で高校の２年半の部活動のうち、コンクール用の曲などいろいろやったのだけど、印象に残りやすかったのは一般向けの曲を多く取り入れた文化祭用のものだった。

その最たるものがこの「独眼流政宗」の曲だった。

５．カラオケ

田原俊彦　「抱きしめて**TONIGHT**」

実はカラオケは大好きだったりする。
しかし、うつ病になってからは、もうだめ。声も出ないし。

大学生時代頃からいわゆるカラオケBOXというものが出始めたような気がする。
友達と結構よく歌いに行った。

うぬぼれでもいいが、自分でも結構うまいと思っている。選曲がよければ。

何が十八番かというと、ここに書いた曲以外にありそうなものなのだけど（声が高めのボーカルの曲とか、女性ボーカルの曲とか）、この「抱きしめてTONIGHT」はたまたまこれを歌ったときに、一緒に行った同僚の人達の反応というか、ノリというか、それがよくて、面白くて、嫌でも記憶に残るという意味で取り上げた曲。

エピソード的にはただそれだけなので、１０曲のうちの１つにするにはどうかとも思ったが、まあいいか。。

６．生歌を聴いて泣いた曲～その１

　岡本真夜　「銀色の週末」

ライブ、いわゆる生の歌を聴くようになったのは社会人になってから。

岡本真夜といえば世間的にはほとんどイコール「TOMORROW」かもしれない。自分もそれをきっかけに知ったのだけど、ハマったのは後に上海万博のパクリ問題で話題になった「そのままの君でいて」をテレビのCMで聴いて、深く考えずそれが入っているアルバムを買ったことに始まる。

岡本真夜のファンクラブにまで入ったほど。

この「銀色の週末」というのはシングルで出たものではなく、セカンドアルバムの中にある曲。だから、ファンでもないとわからないと思う。

この歌詞の中の女の子がかわいらしいというかいじらしいというか、そういう意味でもただでさえ好きな曲だった。

岡本真夜のコンサートには何度行ったかわからない。

あるときのコンサート、たまたまその日は自分の２０代の何歳だか忘れたが誕生日だった。自分の誕生日に好きな歌手のコンサートなんてそれだけでも嬉しかったのだけど、その中でこの曲が歌われた。
その頃、岡本真夜はアカペラでハモって歌うことに取り組んでいて、自分の声だけを何重にも重ねて作ったアルバムもあったほど。ただ、この曲はそのアルバムにはない。

で、その誕生日のコンサートでこの「銀色の週末」をアカペラバージョンで聴いたとき、元々詞の内容は知ってはいたものの、その奏でるハーモニーの中で想像する詞の中の女の子がより一層いじらしく思えてきて、何だかわからず泣けてきた。
本当によくわからないのだけど、泣けてきて、ちょっと鼻をすするような感じにまでなってしまって、周りの席の人に「？」みたいに思われたかなくらい、感動してしまった。

歌を聴いて泣くなんていうのは、これが生まれて初めてだった……。

７．生歌を聴いて泣いた曲～その２

中島みゆき　「あした」

中島みゆきのコンサートというと普通のコンサートと「夜会」のようなものとがあるが、普通のコンサートというのもいつやるのか不定期なのかなかなか機会がなく、後にもおそらく先にもあのときの１回が最初で最後だったかもしれない。

生みゆきのコンサートの１曲目にいきなり「あした」が来た。

ただでさえこの曲は好きなのだけど、それが生の声でいきなりきたもんだから、第一声を聴いた瞬間にブワッっと来て涙が出そうになった。岡本真夜のときのような聴いていてじわじわきたのではなく、ほとんど瞬間的な感じなので「泣いた」とはいえないかもしれないが、こんな感覚はなかなかない。
中島みゆきで泣くといえば、だいたいは詞の世界と自分の境遇なり心情なりがリンクして泣くとかがよくありそうなパターンだけど、今回はそういったものではない。本物を聴いて感激した！の方に近いかも。

中島みゆきは自分で歌うのも好き。本当は。ずっと中島みゆき関連でも歌えるんじゃないかな。でも楽曲がそもそも多すぎるから知らない曲の方が圧倒的に多いだろうけど。

８．歌のうまさというものを実感した

　美空ひばり　「川の流れのように」

歌がうまいとか下手とかという概念が自分にはあまりなかったというか、よくわからなかった。
テレビで見かけるような人というのはプロなわけだからそれなりにうまいのであって、うまさを実感することがなかった。

しいていえば、素人が歌うところを見れば、ああやはりプロはうまいなとは思う。
こう書くと失礼だが、そういう意味で「のど自慢」のような番組は見ていられない。

プロの中でもこの人は歌うのがうまいなぁと思うのはなかなかないのだけど、この美空ひばりが「川の流れのように」を歌っているのを聴いたとき、初めて「歌を歌うのがうまい！」と実感として感じた。

この曲は、よく他のプロの歌手もカバーするが、美空ひばりの歌唱力が圧倒的すぎて、それなりに聴こえはするが美空ひばりにはかなわないし、同じ土俵で比べられるものでもないのかもしれない。

声というか、抑揚というか、強弱なのか、威圧感なのか、いろんな要素で、美空ひばり以上のものはない。
美空ひばりのものまねが非常にうまい人がいるが、それはやはりものまねであって、そう見ればたいしたものではあるが、全然違う。

同じ美空ひばりでも他の曲を聴いているときは、それほど強烈にうまいなぁと感じなかったのだけど、これはなぜなのだろう？

９．父との広島旅行は直接の関係はありません

　いきものがかり　「ＳＡＫＵＲＡ」

いきものがかりのメジャーデビュー曲なのだが、知ったきっかけは東日本の人であればほとんどがNTTの電報のCMだと思う。

なぜなら、野球のWBC（ワールドベースボールクラシック）の決勝のときの中継の合間のCMで流されていた曲がこの曲だったからだ。

季節とこの曲とWBCとセットになって記憶に残っている。
さらに自分の場合で言うと、この決勝の日までの３，４日は広島に父と旅行に行っていて、それとの記憶とも重なっている。

「男たちのYAMATO」という映画があって、それのロケ地巡りツアーというもので広島の呉とか江田島などに父と一緒に行っていた。移動中のバスの車内では多分日程的には準決勝あたりをちらっと見たと思う。

２００６年３月２０日に東京に戻ってきたが、直接家には帰れず後泊。そして３月２１日、WBCの方は日本はキューバと決勝。だが、まだ東京にいた。余裕があれば父とどこか東京観光でもできたはずなのに、それを振り切ってWBCの決勝見たさに、朝泊まっていたホテルからほとんど家へ直帰状態で返ってきてしまった。着いたのはちょうどお昼前くらい。

その決勝の最中に流れていたのがこのいきものがかりの「ＳＡＫＵＲＡ」だった。

そうした記憶と一緒に印象に残っているのだが、この楽曲自体も非常にすばらしい。
いきものがかりはその後も安定してヒット曲を連発しているが、自分の中では上記のような理由もあって、この曲が一番。

ちなみに歌詞に出てくる小田急線にも、東京で働いていた頃、通勤で一部区間乗っていたこともある。歌詞に出てくる区間とは違うが同じ線だ。

いろんな記憶がミックスされている。

１０．人生最期に聴きたい曲

Ｊ．Ｓ．バッハ　「小フーガト短調」

自分はクラシックはほとんどわからない。
なぜいきなりこの曲が出てきたのかというと、中学校のときの音楽の授業で「鑑賞」の時間に聴いてめずらしく衝撃を受けたのがこの曲だった。
パイプオルガンで奏でられる旋律と音がいい。幾重にも折り重なっていくようなところもいい。

この曲だけがきっかけで本物のパイプオルガンの演奏を聴きに行ったりしたこともあったが、やはりこの曲を聴きたい。

最終章なので「最期に聴きたい曲」になっているが、本当の最期でもバックにこの曲が流れていたら何だか荘厳な感じがする。実際にはそんなことにはなるはずもないのだけど。

あとがき

最後まで読んでいただいた方、ありがとうございます。

人生の１０曲を選んだ結果がこれだというのは、どうなんだろう、他にも好きな曲とか聴く曲はいろいろあっただろうに、とも思う。

テーマを設定してしまったからこうなったという面もあったかと思う。

単純に好きな曲とか思い入れのある曲だけだったらもう少し違ったかもしれない。

カラオケでよく歌う曲、コンサートに行った曲、テレビで夢中になってた曲、ポータブルプレーヤーで歩きながら聴いていた曲、この曲を聴くとあの頃を思い出すみたいな曲などなど。

その一部は今回書けたけれども、とりあえずはこれで締めということで。
お付き合いありがとうございました。

マイ・ミュージックポートレート〜主体性のない人生にも音楽はあった

http://p.booklog.jp/book/85838

著者 : junike
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/junike/profile

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/85838

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ